

Title	高橋幸八郎著 近代社会成立史論
Sub Title	
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.6 (1947. 6) ,p.353(47)- 360(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19470601-0047
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470601-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の全體の記録・規約等が明かでないから、その全貌を明かにすることが出来ず、甚だ遺憾ではあるが、同仲間組合の商業的特質はほどこれを窺知することが出来よう。勿論比較的な問題ではあるが、他の江戸における仲間組合に比して、組合員の經濟的協力性が強い方であるといふことが出来よう。

(昭和二十二年七月九日稿)

高橋幸八郎氏著「近代社會成立史論」

宇尾野久

高橋幸八郎氏の近著「近代社會成立史論—歐洲經濟研究史」(日本評論社版)に接して得た感想を私は同書の編別に従つて書き綴る。先づ「序言「方法論的」立場について」から。

著者高橋氏が、史料の重要性を正當に評價しつつもいわゆる「史料の奴隸」として實證主義、客觀主義の框内に躊躇することを峻拒してゐられるのを全く正しい。史學を決して史料学そのものでない。(ラムブレヒトの見解—歴史研究と歴史記述との峻別—参照)史學の發展を正にその遺産の正統な「科學的な」開拓者によつてのみ前進せしめられる。一ところのサヴェーント史學がボクロウスキイによつて偏向せしめられたのまさにかかる史學の狹隘化にあつた。レーニンは「吾々如何なる遺産を拒否するか?」(一九四五レーニングラード發行)の小冊子の中で次のやうにのべてゐる。「啓蒙者わ、たゞ彼に固有な矛盾をみとめなくとも、一定の社會的發展を信ずる。ナロードニキわ、彼が、すでにその矛盾を認めても、一定の社會的發展から尻込みをする」と。著者わすでにヨーロッパ史學の遺産

を繼承されるに當つて發展するべき矛盾、「發展わ對立物の「闘争」である。レーニン全集十三卷三〇一頁)が自己の遺産の中には存在すること更にその遺産の矛盾の發展から尻込みしてわならぬことを最初に明示せねばならぬ。

著者わマルク・ブロッホのいわゆる「歴史を逆に讀む」遍行的方法(méthode régressive)を歴史學の論理水準の高揚として居られる。(序言八頁)私はかつてブロッホのこの箇所につき當つた際にマルクスの次の言葉を思ひ出して今更乍らマルクスの偉大さをしのんだ。「人間の解剖は猿の解剖に對する鍵である」(經濟學批判)と。又これと同様に前掲のマルクスの經濟的範疇についての理解の方法もこのことをうら付けるものである。そしてこの事が妥當性をもつてのわ人間社會のフォルマツォンが前進的な系列を成してゐることに由來する。(ヴェラ・ザ・シリツチ宛の手紙)

著者わ更に東洋世界、アジア的歴史的生產社會の「つたる日本」の封建構成に對して、「恐らく純粹に封建的なものではない」(序言一四頁)と言つて居られるが、封建社會の申し子のやうに考えられてゐたダルマン封建社會についてのトムソン教授の指摘(J. W. Thompson, Feudal Germany, p. 292)又はジョージ・ベートン・アダムスがエンサイクロペディア・ブリタニカ十一版で封建制度を一様に典型的に解すべからざる點

を指摘した事、その外 Joseph Calmette *Le Monde Feodal*、Petit-Dutailly *The Feudal Monarchy in France and England 1366* 等々を考へた時、著者が「特殊な市民的偏見」として拒否された「ヨーロッパ中世の土地所有の歴史記述」にかわる「古典的に純粹な世界史的段階構成の指標」（序言一四頁）わ、それが「類型學」の手法又は方法論をとる限り困難なものなり、かくて上原博士の指摘された如く（獨逸中世纪研究、一四頁）、新見博士にみる如き封建社會の概念の西洋への輸出（2）の要求さえ生ずるに至る。

今後著者の世界史的段階構成の研究がすゝめは進むほど「類型」學の monotony わよしそれが如何に精緻なものであらうとも激しい生活體験をもつ若き學徒にわすでに納得され得なくなるのでわなからうか？

- (1) 土地所有の問題わ封建社會の最も本質的部分でわあるがなをその全部でわない。
- (2) スターリンの人類社會史の基本的發展段階の時代分けに就いての要求わ之等の類型又は類概念の講壇的規定と決定的相違する。

次に第一編、ヨーロッパ資本主義の國民的「類型」—現代歷史學水準への「視角」について。

フランス大革命を「農民革命」と規定する近代フランス史學

わ正にフランス革命のフルジョワ的性格を浮彫にしてゐる。フランス「ブルジョワ革命」それわクロボトキンの言うやうに「幾世紀もかゝつて地中に根を下ろし、最も熱烈なる改良家たちでさへも、その著作中にそれを攻撃することを取てなし得ないほどの、確かりと動かし難く見える所の制度の僅少年間に於ける迅速なる顛覆である。」

かつてレーニンが一九〇五年の革命の前夜にロシア社會を科學的に検討した時、ロシアのツアーリズム、封建制度に對する徹底的な究明と革命の眞の擔い手並びにそれをうみ出したある資本主義の發展とを明確にえがき出した。その際レーニンわづ最初に封建制度の性格をその發展、漸進的崩壊の過程に於いて捉え、その内部における資本主義的關係の發生を明かにした。

その際、問題となつたのわ、資本主義制度の類型的講成でわない。そこでわ封建社會の矛盾の所産としての資本關係の誕生であることを忘れてわならぬ。

マニユフマクチニア時代に於いてわ資本わいまだ「規定者」とわならぬ。だが資本わいフマクチニア時代の構成的矛盾の中點たること忘れてわならぬ。この點を没却すると、この時代の國家權力の性格把握わ混迷の淵に顛落する。レーニン *de facto* としての階級分化に注意してゐる。—發達、邦

譯、下巻二五頁。

ロシア封建社會を特徴付けるミール、それはもはや近代的物神を防ぎとめる唯一の城塞でわなかつた。土地貴族（それにもまして東洋專制主義リツアーリズム）の慾意とミール内部でのブルジョワ的諸關係の發生わすでにロシア社會を絶對的にも（農業生産力の減退—エンゲルス）相對的にも（農民層の分解）窮乏せしめてゐた。ロシア社會の危機リ人民の不幸わこれのみに止まらない。封建的遺制が資本主義的搾取の道具に轉化した時、窮乏と困亂わ正に言語に絶したものとなる。（クローポトキン「一革命家の思ひ出」大杉榮譯）かゝるブルジョワ、地主的搾取のロシアの野蠻な袋小路に對して行われた農奴解放が地主にとつていさゝかの利益の喪失も勘定に入らぬことわもはや明白な事實である。（ヴィリナ總督ナズイモフに與えられた解放に關する勅書。參照）洗練された資本の強靭な國々の美事、革命の類型の中わなしに資本主義の最も遅れた國々での弱いがしかし無遠慮な資本、及びツアーリズムの振舞の中に革命わ最もその本質的な面を曝露した。（1）

それにもかゝらずフランスわ正しく革命の祖國である。著者の優れた鬪魂が、進歩的な眞理元の熱情が、問題の核心を銳くメスラつきさしてゐる。

- (1) がゝる相違の對照を明確に示したものとして、スターリ

著者も續けて「本稿は所謂社會經濟史學派への批判接觸點及び限界點」に一つの力點がおかれ。ちなみに、近代國氏運動史序説の「歎たるものである」(二四頁)と。だが問題も本來の「鬭爭の場」(論争點)で決せられねばならない。何故なら問題の發展(政治えの)擴大化正にこの「鬭争の場」の中で諸々の矛盾を萌芽するからである。

史形成の問題提起こそ正に社會經濟的「類型」學の要請とわ
眞反對に「近代國民運動」、「革命」史の展開として出發す
る。

「フランス革命の序曲もやはり著者が正しく指摘されたやうに、『所謂農奴解放』と呼ばれるものであつた。『所謂』とわかつて、A. ドーブシェが「Die Sogenannte Urzzeit」(“Grundlage, I. Teil, S. 53.) と述べた際の凋倒な「用意」(上原博士「獨逸近代歴史學研究」九三頁) というよりも「農奴解放」が、名實、正に相反する事に對する著者の鋭い洞察に由る。

著者れ、正に眼光を紙背に徹して、「農奴解放状」の内容をばくろし、「解放」とわ「農奴」と「自由」を「交易する」(五二頁) ことであつたことを明快に指摘されてゐる。だがそれわ、同時に「領主制的土地位所有⁽²⁾」、「莊園」のタイプの地域的

(3) 史的唯物論の過程を對立物の相互滲透性—矛盾の發展
シアキーヴ認めることによりこの過程を具體的ならしめた。

この過程わ絶對權力自體に於ける矛盾から、物質的構成に於ける對立更に國內、國外的對立に到るまで革命（構成的矛盾の集中）に於いてその中點を露呈する。更的法則わあく迄も自己を貫徹する。しかしかゝる法則を貫徹せしめるものわ闘爭する物質的・階級的人間である。

「第三編、封建社會解體への『對應』に就いて——絶對主義成立への連繫」について。

農業及び土地所有の形態」〔フランス「農業制度の型」の把握を
その研究の「礎石」にをき、更に「B」かかる「型」の旋回
の究明を問題とされる。〕

吾々が封建社會の全經濟構造の礎石が新しい研究によつて明らかにされつゝある中世都市の發展にもかゝわらず、尙農業にあつたこと更にそれが政治、思想の運動と相互に滲透し合い乍ら近代社會體制と運動を開始したことわ何等異存がないか、個々の農業制度の「型」のつづり合せが、そしてこう云つた「型」の力學が、またわ機械的な「段階的・構造的」（一五〇頁）比

〔商業資本の發展の程度と産業資本の發展の程度に反比例する」という『資本』の著者によつて樹立された法則〕〔レーニン「發達」岩波邦譯、下巻、一四六頁〕、わ決してかかる單なる兩資本の力學的運動でなく眞に兩者の決死的な闘争であることを忘れてはならぬ。

この過程わ（一）封建家臣團の分解と共に……（孤立農民經濟（1））ツシム手工業の一部をも起點とする一筆者）新たなマニユフアクチュアが、海港に、又わ舊來の都市やそのツシムト制度の手の届かなかつた平地の諸處に設けられ……舊來の特權諸都市の激烈な抗争を醸し出す（エングルス版『資本』一巻七一六頁。傍點わ筆者）眞に革命的な過程から（二）高利貸資本、商人資本が直接に生産を制握する蝸牛的進行の事態に至る迄まざに「マニユフアクチュアが資本制生産方法の支配的形態となつてゐる時代にわ、マニユフアクチュアの獨特の傾向を十分に發展せしめんとするとき様々の障害に逢着する」（エングルス版『資本』一巻、三三七頁）ことを如實に物語つてゐる。

(1) だが史的唯物論わたり本質的なものののみを研究して、偶然的なものを研究しないとゆうやうな狭隘さわみじんももつてゐない。永田廣氏譯「唯物論と經驗批判論研究」160頁。それどころか、イリーンわあれ程抽象的な哲學の問題を論ずるに當つてもなを生活から一步も遊離してゐない事を明記すべきだ。

(2) 土地所有わ莊園社會の最も本質的な部分であるが、領主、莊民の對抗關係わより廣汎である。

對主義の政治的要求との相互滲透運動にいてその物質的構造の近代的装置轉換過程を明確ならしめる事によつて具體化される。

この際重要な事は絶對主義の史的、一般的な法則をもつてフランス絶對王政の性格を一色に塗りつぶさぬことである。

「特殊性や一般的規定の複合」であるとゆうの誤つてゐる。歴史に置いてわ一般者が特殊を通じて具現するのかくて具現した一般者が特殊により強く制縛されることが問題なのである。(3)

revised 1926.) 又ねアーノ・ボアンカノに支持された」・ワル・ラブ (La lettre de M. Poincaré reproduite dans la note de L. Walras intitulée "Economique et mécanique," citée par Antonelli, Léon Walras, dans la Rev. d'histoire des doctorines, 1910, p. 117 et Principes d'économie pure, pp. 66-7.) 及びバレンタインが専經濟學の深奥を把握し得ず、セグー、ヒックス、ハイモック又わJ. ケイーンズにみる如き轉落えの路をたどつたとするならば正にそれは如何に精緻なものであらうとも「機械論」の一語につきるであらう。(2)

史的探究に於いてこの著書わまさしくこの「機械論」の危機に惹かれてゐる。一ただ史的展開のケンランが之を詮するのみ。

(1) 「マニユアクチュアの時代に土地の耕作を副業とし、工業上の労働を主業として「労働の生産物を直接に、又や商人の手を経て間接に、マニユアクチュアに販賣する所の小農民」という新だなる階級がつくり出される。而してこの事わ、英國史の研究者をして最初に昏迷せしめる現象の主要原因でないにしても、少くともその「原因となつてゐるのである」(エンゲルス版、「資本」一巻、七三頁、傍註わ筆者)、「個別分散的なマニユアクチュアが大抵わ小農業と結合するものであつてそれ唯一の自由なマニユアクチュアなのである

」(同七三頁傍註わ筆者)。

(2) ヴィー・ライヘルトわマックス、クーベーの「古代農業史」に就いて正當にも次のやうに述べてゐるトックス・ウーバー「古代を資本主義と同一視する點 L. Brentano Das Wirtschaftsleben der antiken Welt 1929 参照」(筆者)するやうな平坦な現代化と無縁である。彼の見解わ、きわめてアリケートである。……と云ふえ、古代「都市封建主義」および古代農奴制度の諸關係の理論わ、またマックス・ウーバーその人から出て來てゐるのである。「前掲書二六頁」M. ウーバーの「Wirtschaft und Gesellschaft」を貰く、理論の精緻さわまさに近代講壇社會科學の精隨である。

「第四編、近代的進化の一「體系」に就いて、一土地問題に於ける對向的透視」について。

「二つの體系」、これわレーニンによつて「アメリカ的道」と「プロシヤ的道」として法則付けられたものである。だが俗流マルクス主義者と異つて、事物を經濟主義的な狭いわくで捉えることをしなかつたレーニンにをしてわこの場合にも常に「政治わ科學の適用である」又は「政治わ經濟の集中である」、更に「一切の階級闘争わ政治闘争としてあらはれる」ということがその出發點をなす。

マルクス・エンゲルスわ「クリーチに對する聲明書」の中で

農業改革を起點とするプロシア絶對主義の近代的君主制の僞裝的裝置轉換の一権利である。

「最後に第五篇、市民革命の構造展望、試論」フランス革命史研究序説」について。

著者が、封建的な母胎から生れてくる鬼子としての獨立小商生産者=農村手工業者・獨立自營農民を克明にフランスの史實に即して析出される限りに於いて、それは正しい方向付けと云わねばならぬ。だがこの場合問題なわイリーンが、一九〇五年の革命のためにとつた分析方法(マルクスの資本論からの發展、具體化の理論)が考慮されねばならぬ。この場合イリーンの方法論を確立した。イリーンの市場論わ明確に、封建社會から資本制社會との發展過程、法則性を規定する。この意味に於いてこの理論わ明らかにマルクスからの發展であり、且つナードニキ的な、アカデミックな、資本論研究と決定的にともとを分つものである。

この場合イリーンわ事實上の資料には多く觸れないで何よりも先づこの過渡期の基本的な資本發展の法則を確立した。だが現實の過程わ決してウーバーの考えるやうに純粹に貫徹されるものでない。例えイギリスに於いてみられるやうに史實

吾々わこう云つた史的法則が歴史のこの場面に必ず登場する」とを確認すると共にその要求が實践的なものとして出てくる時こそレーニンが後に「ブロイセン式」土地解決法(1)に對立させた、「アメリカ式」解決法と名づけたところのものである。

かゝる對向性の同一過程におをける包藏(従つてその闘争發展の物質的諸條件)こそ正にフランス革命の性格を決定する。

吾々わこう云つた史的法則が歴史のこの場面に必ず登場する

ことを知る。日本における民主革命の過程わまさにこの事實を物語つて餘りあるであらう。

(1) ブロイセン式土地解決法とわシュタイン、ハルデンベルヒの

の上からわホウハイたる農村に於けるマニユアクチユアの勃興を習々わ検出することが出来る。だが問題わこの過程にかもし出された矛盾・鬭争にある。(1)

(註) この矛盾をレーニンの「市場論」又わマルクスの「實現の理論」に見つけ出そとしたのわナロードニキだけである。

イリーンわここで「十九世紀末に於けるロシアの農業問題」「發達」等を通じて、この矛盾の發展の過程をその底を貫く明確な理論的法則の上に立つて具體化し、ロシア・ブルジョア革命の實踐上の指針を與えた。この理論的把握わロシアが遅れて居ればある程益々その重要性を加えてくる。「農業に於ける資本主義邦譯」白楊社、二四頁、八五頁

著者が、具體的な史實を捉え、理論を發展せしむるに當つてかかる矛盾、物質的鬭争の面を捨棄されて、ウーバー的な「類型化」にのみ没頭するならば、もはや史學の發展を一面化し、固定化し、單なるウーバー史學の不斷のくりかえしに終らずを得なくなるであらうことを懸念するものである。

(二) この矛盾をレーニンの「市場論」又わマルクスの「實現の理論」に見つけ出そとしたのわナロードニキだけである。

一九四二・五・二

アメリカ經濟に 關する三小著

山 本 登

終戰後わが國において公刊されたアメリカ經濟研究書は、時

間的餘裕から云つても大部のものは望み難い實狀であるが、昨

年中に刊行されたものゝ中から、次の三つの小冊子を選ぶことが出来る。(註)

一、都留重人氏著「米國の政治と經濟政策」(昭和廿一年五月再版「初版昭和十九年」有斐閣)。

一、鹽野谷九十九氏著「アメリカ經濟と經濟的民主主義」(昭和廿一年六月刊)水谷書房。

一、小原敬士氏著「アメリカの通貨金融政策」(昭和廿一年十二月刊)世界經濟調査會。

(註) この外に鹽野谷氏「アメリカ經濟の發展」(昭和十六年初版 日本評論社)が再刊されたが、歴史的發表の記述を中心とし、他の二著と多少趣を異にするので、茲では前掲書の方を選んだ。

いづれも戰時或は戰後の忽卒の間に筆に成つたものだけに、にも又理論的、實證的にも分析が進められなければならない。この方面についての今後の組織的研究の遂行に多大の期待を懸けると共に、他面差し當つては、戰時中アメリカにおいて發刊

・アメリカ經濟に關する三小著

五五 (三六一)